



普及指導の現場から

No.1

漁業の規模は陸の手の数で決まる！

北海道オホーツク総合振興局産業振興部 網走西部地区水産技術普及指導所 所長 石崎 裕之

北海道では、ホタテガイ、サケ（シロザケ）、昆布、サンマなどを主体に、124万トン、約2,700億円の漁業生産があります（H23年）。中でもホタテガイ、サケ、昆布は「北海道栽培3種」と言われ、種苗生産および放流事業あるいは養殖技術の確立、また、漁場造成などによって高い水準での安定生産を果たしています。しかしその中で、昆布の生産量はピーク時の3万トン前後から、近年では2万トン弱と大きく減少しています。

北海道の日本海側に浮かぶ利尻島は、利尻昆布の名が示すとおり昆布の主要な産地の一つです。天然（採藻）・養殖合わせて年間約600トン（乾燥製品重量）、11億円前後を生産しており、天然と養殖の生産割合は1：2となっています。天然昆布の採取には、利尻漁協全組合員700名（H22年）が従



家族・親戚縁者総出で干し上がった昆布を回収します。（利尻・養殖）

事し、1組合員当たりで約60万円の生産があります。一方、養殖は1軒当たり6～7トン、1,200～1,400万円と、繁茂状況や気象・海況に左右され易い天然に比べて経営も安定しています。それにも関わらず、20年ほど前には100軒ほどあった養殖漁家も、現在では60軒弱にまで減少し、今なお歯止めが掛かっていません。

利尻漁協の養殖昆布の生産量は、ここ数年400トン前後で大きく変わっていません。それは、廃業者の養殖施設等を継続する養殖漁家で分配し、引き継ぐことで個々の生産規模を拡大し、地域全体の生産量を維持してきたからです。しかし、それも限界だと言います。私は、「沖の施設には空きができるし、干場（天日乾燥する土地）だって止めた人の土地を借りれば良いっしょ」と問いかけてみました。すると、「モノや技術は何とかなる。でもなあ～、人手だけほど



昆布干し（利尻・養殖）

家族・親戚縁者はもちろん、アルバイトも募集し、早朝に大人数で行います。

うにもなんねえ。昆布漁業の規模は陸の手で決まるんだよ」と返ってきました。

私たち普及員は、資源を増やし、管理し、それを上手に利用していくことで生産が安定し、ひいては収入も安定し、地域も活性化すると考えていました。しかし、「いくら水揚げがあっても、それを陸で捌けなければムダになる」というのです。まさに盲点でした。水産資源とは『水産動植物のうち、人間が何らかの目的で利用するもの』と定義されています。増やしても利用できなければ資源ではないということです。しかし、これは昆布に限ったことではありません。

利尻島のうに漁業は、漁獲したウニを各漁家で殻を割り、むき身加工して出荷しています。このため高齢者には労働負担が大きく、漁獲後の陸作業がほとんど無いなまこ漁業（たも採り）に転換する漁業者が増えています。また、ある刺し網漁業を営んでいた40歳代の漁業者は、網外しの手が確保できずに、その刺し網漁業を止めてしまいました。

現在、利尻島の人口は5,000名余りですが、H47年には半分になるという試算があ



刺し網に掛かったにしんを9人もの人手ではずしているところです。(留萌)
鮮度を落とさない様すばやく作業します。



昆布の整形（利尻）

出荷製品規格に合わせ、専用ハサミを使って一本一本長さを揃え、葉の両側（耳）を切り落とし、整形します。数ヶ月間にわたる地道な作業です。

ります。北海道全体でも現人口の20%にあたる約120万人が減るそうです(国立社会保障・人口問題研究所)。

昆布漁業は採取（収穫）、乾燥、整形、荷造りと、製品に至るまでの全ての工程で人の手を要します。とくに養殖昆布の天日乾燥では、「(干し子は)何人でも欲しい」と言います。農業では耕耘機、田植機、コンバインなど、生産工程に対応する機械があります。漁業でも漁船のハイテク化など、「獲る」部分では能力を向上させてきました。しかし、陸作業では、いまだ「人の手」頼りなのです。

陸作業の省人化は必須の課題だと思えますが、単に機械化を図れば問題が解決するとは思えません。昆布では品質の劣化を恐れ、機械乾燥に抵抗感を示す漁業者も多くいます。費用面での検証も必要です。漁業については、昆布漁業に見るように、消費や流通の形態なども踏まえながら、全般的な生産システムを今一度検証し、新たなビジネスモデルを考えていかなければならない時期が来たようです。